



生涯学習だより

平成30年度 第40回 「少年の主張」 群馬県大会 優秀賞作品

「便利と時間」

松井田南中学校 三年 多胡 斗稀

「ねえ、私の話を聞いてる？」
母からの言葉に、はっとすることがあった。今まで夢中で気がつかなかったのだ。スマホをずっとのぞき込んでいたから…。

最近、身の回りで便利なものがたくさん増えた。例を挙げると、スマホ、PC、TV、AIなど。それらが社会で広く使われるようになり、必要不可欠な存在となった。確かに私もこれらのものは便利だと思うが、果たして私はスマホのおかげで生活が豊かになったのだろうか。

確かにスマホのおかげで、電話、メールはもちろんのこと、時計やアラーム、スケジュール管理だってできるし、インターネットに接続すれば調べ物や買い物だってボタン一つでできてしまう。とても良いことばかりだ。しかし、注目してほしいのは、スマホとの「向き合い方」なのだ。

私のように、中学校入学と同時にスマホを買ってもらう人は段々増えてくるだろう。その時に多くの人が、保護者から「け

じめをつけて使いなさい。」と約束させられるはずだ。私もそうだった。しかし、使っているうちに段々スマホの虜になり、気付いた時には、どんな時でもスマホが無いと落ち着かないという状態にまで陥ってしまったのだ。私は家の人に反抗しようとか、勉強なんかどうでもいいだなんて少しも思ったことがない。しかし、スマホに夢中になっていた時期は成績は下がり、部活は集中できず、家族との会話も減るといって最低な生活を送ってしまった。自分がまさかこんなことになるなんて思ってもみなかった。

スマホが世の中に普及してからというものは、街を歩いても、電車に乗っても、ごはんを食べる時も、そして家にいる時さえ、周りのほとんどの人が下を向いている。誰かに声をかけられるまで、ずっとスマホをいじっている。

私は「便利」の悪い点は、「時間を生み出すが、その生み出された時間を別のことに使わ

せる。」点だと考える。便利なのは仕事の効率を上げてくれる。大人数に向かつて何かを連絡したい場合、スマホのおかげで今までの携帯電話よりも何倍も早く伝えることができる。その分の余った時間が生まれるのだ。

では、「便利」によって余った時間はどのように使われるのだろうか。

時間が余ると、人はゆとりを感じてしまう。「便利」を知ってしまった私たちは、時間を有効に使うのではなく、その余った時間を楽しみに使える時間と捉えてしまうのだ。例えばやるべき事が山積みになってしまっても、どうしても後に待っている苦勞よりも、目の前の楽しいことを優先させてしまう。気がつけば、「便利」で生み出された以上の時間を楽しみに費やし、そこから後回しにしていたやるべき事をするという悪循環に陥ってしまうのだ。結果的に、自分の首を自分で絞めてしまっているのだ。

私は、自分の首を解くために、スマホを使用するのを諦めて保護者に預けることにした。私一人の力では、「便利」の魅力に勝つことはできないと悟ったからだ。今では成績も落ち着き、部活動や家族に対する姿勢も良くなったと自分自身でも感じる。だがあの時期のもったいない時間の使い方を取り戻すことはできない。

「便利」を全て消すことはできない。私も高校生になったらスマホを返してもらい、友達作りや勉強に役立てていきたいと考えている。ただ、今はそれができる力がないだけだ。「便利」は現代社会に必要不可欠な存在となった。「便利」との共生、それこそが私たちが間いかけ直さなければならぬものなのではないだろうか。あなたは「便利」を有効に使えていますか。真の「便利」とは何ですか。

今年度の第41回「少年の主張」安中市大会については、P21をご覧ください。